

台湾・国立中山大 連携を強化

楊学長が来学



本学の国際交流協定校である台湾・国立中山大の楊弘毅学長が4月25日、生田キャンパスを訪

▲「今後もさまざまな交流を行っていきたく」と語る楊学長(右から2人目)

問し、更なる連携強化について確認しあった。訪れたのは楊学長と郭育仁・日本研究センター執行長ら4人。楊学長は「専修大学は重要な協定校。今後も友好的な関係を続けたい」と力強く語った。両校は留学生の相互派遣の活性化について話し合ったほか、教員の学術交流についても意見を交わした。

楊学長は、5月20日付で、台湾の科学技術振興行政を担当する科学技術部のトップ・科学技術部長として入閣が決まっ

いる。楊学長は「科学技術をはじめ、さまざまな分野で専修大学との協力を期待したい」と呼び掛け、高橋裕国際交流センター長が「必ず実りある交流ができると思う」と応えた。楊学長は4月24日には長年親交のある日高義博理事長と面会。都内で開

16年度前期14人 寮内留学始まる

国際交流会館で専大生が留学生と共に生活する「寮内留学」の2016年度前期プログラムが3月23日から始まり、2年次生5人、3年次生7人、4年次生2人の計14人が入寮した。

寮内留学プログラムは専大生がレジデント・パトナー(RP)として入寮し、国際交流協定校からの短期留学生や特別聴講生らと寝食を共にする制度で、留学生のサポートを通じて異文化理解が図られる。

寮内留学プログラムは専大生がレジデント・パトナー(RP)として入寮し、国際交流協定校からの短期留学生や特別聴講生らと寝食を共にする制度で、留学生のサポートを通じて異文化理解が図られる。RPは4月30日に再入寮し、8月上旬まで国際交流会館に滞在。5月9日～6月8日の春期日本語(JLC)と、6月17日～8月6日の夏期JLCの短期留学生と2人1組で同じ部屋で生活する。RPの嵯峨卓卓さん(経営3)は「寮内留学に参加することで、平凡な大学生生活に変化を起せそう。留学生とコミュニケーションを図り、異文化理解を深めたい」と意気込んでいる。

米オレゴン大学との国際交流協定締結25周年を記念した式典が4月25日、生田キャンパスであった。1990年3月に協定を締結。これまでに本印を行い、両校の絆を新

新たに 締結25周年



米オレゴン大学との国際交流協定締結25周年を記念した式典が4月25日、生田キャンパスであった。1990年3月に協定を締結。これまでに本印を行い、両校の絆を新

シャフアメイヤー氏と高橋裕国際交流センター長は協定書に調印し、固い握手を交わした。



▲イングリッシュ・キャンプで英語を特訓するRP

高橋国際交流センター長 北米3校を歴訪

高橋裕国際交流センター長(商学部教授)が2月、北米の国際交流協定校3校を訪問し、学生や教員間の交流の活性化について、各大学の担当者や協賛した。訪問したのは今年1月に国際交流協定を結んだカナダのカルガリー大学、長年交流が続く米ネブラスカ大学リンカーン校、オレゴン大学。訪問の成果を高橋センター長に聞いた。

濃密な相互交流へ

今回の訪問の目的は、新たに国際交流協定校になったカルガリー大学に本学の魅力を直接伝え、今後の相互交流の内容を協議すること、長く協定を結んでいる米の2校については、更に濃密な交流にするため、対面でのコミュニケーションを大切にしたいと訪問してきました。どの大学でも、身近な友人のように出迎えていただき、専大との友好関係を強く感じました。建設的な協議を重ね、互いに信頼できる協定相手と再確認でき、大変実りある訪問になりました。

カルガリー大との協定締結は今年1月ですが、それ以前から本学の日本語・日本事情プログラム(JLC)で200人以上のカルガリー大生が専大を訪れています。これまで日本語学習を中心とした交流が続いてきました。互いをよく知ったうえで、大学間協定締結ですので、これからも意義のある交流



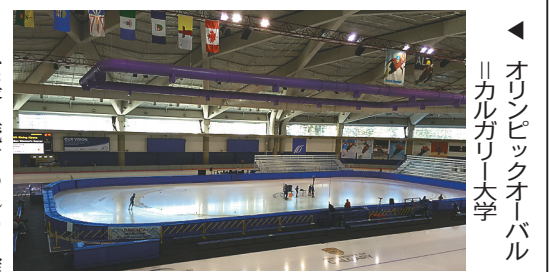
本学の国際交流センターは顔の見える「個人間の信頼関係」を基本にしています。今回の訪問もそのあらわれで、顔を見ながら生の声でのコミュニケーションの積み重ねが長期にわたるものだと思います。自らが大きく成長し、日本を、そして世界をより良くしていくのだという気概で留学にチャレンジしてほしいと思います。そのためには計画的な準備が大切です。国際交流センターの留学支援講座などを活用してください。留学自体を目的化せず、大きな目標に達するための一つのステップと捉えて、ぜひチャレンジしてほしいと思います。

学生の成長が高評価に

一方、ネブラスカ大学リンカーン校は協定締結31年、オレゴン大学は26年と、ともに長い実績があります。

真の思いやり学んで

「留学を通じてどのようなことを学んでほしいと思われませんか。現地の生活は刺激にあふれ何にも代えがたい楽しい毎日になるでしょう。一方で背景の異なる人々に囲まれて生活、学習することで、マイノリティの感覚を味わうこともあるでしょう。そこから逃げず、自らの力と周囲の助けによって克服することが重要です。そうしたことにより自分とバックグラウンドが異なる人々への配慮ができるようになります。こうして身につく真の思いやり力は、語学力と同等以上に大切なものだと思います。」



オリンピックオーバル、カルガリー大学



ネブラスカ大学リンカーン校の教職員と高橋センター長(前列右から2人目)

を長く続けられると確信しています。本学及びJLCの評判は、こちらの想像以上に高いものでした。今後はさまざまな専門分野での交流を現実させたいと思います。

交流の秘訣の一つといえます。もう一つ強調したい点は、留学した学生の皆さんが、しっかりと学び大きな成長を遂げたことが協定校での専大の高い評価につながっているということです。友好的な雰囲気の中で専大生が協定校で勉強に打ち込み、それがさらに現地で信頼につながるという良いサイクルが生まれています。本学の豊かな国際交流実績は、まさに学生の皆さんの努力が大きく貢献してくれているのです。

協定校側から見た専修大学はどのような大学でしょうか。また、今後はどのような交流が期待されますか。

どの協定校からも「継続的にプログラムを改善し続ける信頼できるパートナーだ」と評価されています。加えて近年は研究機関としての注目度も上がっています。

ネブラスカ大学リンカーン校では「学生交流に加え、教員交流も行いたい」との言葉をいただきました。本学側も多様な教授陣を紹介し、win-winの関係で研究交流ができることをアピールしました。今後は他大学ではみられないような、質の高い学術コラボレーションが実現すると確信しています。